PHILOMUSICA ORCHESTER KYOTO

IDYLLE

SOUS BOIS

DANSE VILLAGEOISE

SUITE PASTORALE

SCHERZO-VALSE

京都フィロムジカ管弦楽団

第40回定期演奏会

2016年12月25日

滋賀県立芸術劇場　びわ湖ホール

お客様へのお願い

〜誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします〜

●携帯電話･アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、
電源を必ずお切りください。

●演奏中の私語は固くお断りいたします。

●客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。

●補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。

●「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。
なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。

●演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

●演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。

京都フィロムジカ管弦楽団
第 40 回定期演奏会

2016 年 12 月 25 日（日）午後 2 時開演

滋賀県立芸術劇場　びわ湖ホール(大ホール)

曲目

シューマン／劇付随音楽『マンフレッド』序曲

Robert SCHUMANN : Ouverture zu Manfred

シャブリエ／『田園組曲』

Emmanuel CHABRIER : Suite Pastorale

Ⅰ. Idylle	Ⅰ. 牧歌
Ⅱ. Danse Villageoise	Ⅱ. 村の踊り
Ⅲ. Sous Bois	Ⅲ. スー・ボワ
Ⅳ. Scherzo-Valse	Ⅳ. スケルツオ - ワルツ

―休憩―

ブラームス（シェーンベルク編曲）／ピアノ四重奏曲第 1 番（管弦楽編曲版）

Johannes BRAHMS : Quartett Nr.1 für Pianoforte, Violine, Bratsche und Violoncell

(Arnold SCHÖNBERG)　　für großes Orchester gesetzt

Ⅰ. Allegro

Ⅱ. Intermezzo

Ⅲ. Andante con moto

Ⅳ. Rondo alla zingarese

指揮：遠藤 浩史

京都芸術センター制作支援事業

ロビーコンサート

午後1時15分より開催

酒井 格／『おはよう』

Fl.：高松、桃川、御園生、間嶋

作曲者・酒井格によるとこの曲は「朝、太陽が昇り、植物が光合成を始め、酸素がたくさん作り出され、小鳥たちは、それに感謝して囀る。その話を聞いたとき、私たちが呼吸をし、フルートを吹けるのは、豊かな緑のおかげなのだ、と改めて気付きました。この曲は、そんな小鳥たちの感謝の歌です」とのことです。酒井は高校時代にフルートを演奏していたそうで、ホームページではこの曲を「タンギングの良い練習になると思いますよ(笑)」と書いています。本日はびわ湖ホールに来ていただいたお客様に感謝の気持ちを込めて、４本のフルートが囀ります。

シュティーグラー／『聖フーベルト・ミサ』Hubertusmesse

Hr.：加藤、福山、北山絵里、千場、山影、中澤、渡辺悠

作曲者のKarl Stieglerは伝説的なホルンの名手です。タイトルにある聖フーベルトは狩猟の守護聖人です。ホルンは狩りに使われた楽器ですので、まさにホルンという楽器の魅力を味わうのにふさわしい作品と言えるでしょう。

シベリウス／『ティエラ』TIERA

Tp.：北山武志、瀧澤、天神　Hr.：北山絵里　Pos.：安田、中村　Tub.：中塚　指揮：遠藤啓輔

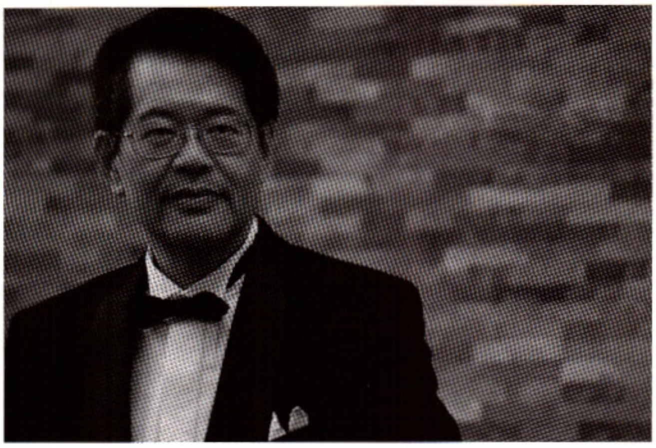
トランペットの北山君が廃版寸前の楽譜を入手したことから今回の演奏が実現した。原曲はブラスバンド用の金管楽器と打楽器が指定されているが、本日はオーケストラ用の金管楽器で演奏したい。

ティエラはフィンランドの大叙事詩『カレワラ』のチョイ役で、好戦的な英雄レンミンカイネンの親友という設定である。楽譜には「１８９８」(第１交響曲の作曲年)と印刷されているが、菅野浩和によるシベリウス作品目録では１８９４年には完成していた可能性が示唆されている。この年は、シベリウスが『カレワラ』によるオペラを構想しながらも頓挫し、その素材から『レンミンカイネン組曲(４つの伝説)』を作曲していた頃である。ここから『ティエラ』は『レンミンカイネン組曲』を作曲する過程でスピン・オフ的に生まれた小品と推定できる。

宿敵ポホヨラの女主人との再戦を決意したレンミンカイネンは、ティエラを戦に誘う。ティエラは新婚間もない妻ら家族を故郷に残したまま、レンミンカイネンとともに舟に乗って冬の海へと漕ぎ出す。曲の冒頭は荘重な序奏で、妖気漂うシベリウスらしい和声が伝説の世界へと聴衆をいざなう。快活な主部は『カレリア組曲』と同様「行進曲風に」と指定されている。ポホヨラへの進軍を表現しているのだろう。しかしながら戦いの悲惨さは全く感じられず、むしろ愉快だ。それもそのはず、彼らの戦いはなんと歌合戦なのである。歌の呪力のために、ティエラたちの舟は氷に閉ざされる（窓の外に見える冬の琵琶湖を、フィンランドの海だと思って聴いていただきたい）。彼らは舟を捨てて森をさまよい、結局は馬に乗って故郷へ逃げ帰る。最後はやはり『カレリア組曲』同様、唐突にテンポが遅くなり、堂々と結ばれる。僕はこれを、「歌い納めよう」と語る吟遊詩人の鷹揚な朗詠だと考えている。（遠藤啓輔）

指　揮

遠藤 浩史（えんどう　ひろし）



大阪生まれ。大阪音楽大学ピアノ科を経て、桐朋学園大学オーケストラ指揮専攻科に学ぶ。これまでに指揮を小澤征爾、尾高忠明、秋山和慶、黒岩英臣、小松一彦、岡部守弘の各氏に、ピアノを山本瑛子、梅本俊和、山田朋子氏に、二重奏及び室内楽を、中山朋子、間宮芳生、江藤俊哉、金昌国の各氏に、作曲を、三善晃氏にそれぞれ師事。

1992 年、南スイスのルガーノで行われた「マスタープレイヤーズ講習会」においてマスタープレイヤーズオーケストラを指揮し高い評価を得ると共に、R. シューマッハー氏により指導を受ける。1996 年７月には、ソンバトヘイ（ハンガリー）で行われた国際バルトークセミナーにてファイナルコンサートの指揮者に選ばれサヴァリア交響楽団を指揮し絶賛を博す。1999 年８月には、ウィーンとブダペストで行われた「日独楽友協会指揮者セミナー」にて K. レーデル氏に師事。

エレクトーンアンサンブルによる電子オーケストラとの共演も積極的に取り組み、特にピティナピアノコンペティション協奏曲部門や東京六大学ピアノコンサートを含む各種演奏会の指揮を担当した。また演奏頻度の少ない作曲家の作品も積極的に紹介することにも力を注ぎ、1995 年には P. マッカートニーのクラシック音楽の分野の大作「リバプール・オラトリオ」を、2005 年には、エストニアの作曲家であるエドアルト・トゥビンの交響曲第４番「叙情」（管弦楽：京都フィロムジカ管弦楽団）を日本人指揮者として初めて指揮し大反響を呼んだ。

1999 年 11 月 11 日、オーチャードホールにて新星日本交響楽団（現：東京フィルハーモニー交響楽団）を指揮し絶大なる評価を得、その模様はＮＨＫ、スカイパーフェクＴＶでオンエアされ、また「音楽の友」をはじめとするさまざまなメディアにて賛嘆の記事が寄せられた。2004 年 12 月９日、ロンドン、バービカンホールにてイギリス室内管弦楽団を指揮し大成功を収め、海外メジャーデビューの第一歩を踏み出した。これまでにイギリス室内管弦楽団、群馬交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、新星日本交響楽団（現：東京フィルハーモニー交響楽団）、東京ニューシティ管弦楽団、日本新交響楽団（現：東京ユニバーサルフィルハーモニー管弦楽団）、東京合唱協会をはじめ、たくさんのオーケストラや合唱団を指揮、また、ウィーン･ザイフェルト弦楽四重奏団、樫本大進（ヴァイオリン）、橋本杏奈（クラリネット）、エリザベート・ガンター（クラリネット）、ダリオ･ボヌッチェッリ（ピアノ）、マインハルト･プリンツ（ピアノ）他、多くの世界的アーティストとも共演している。さらには門田展弥氏のクラリネット協奏曲第１番をイタリアの巨匠、ミケーレ･インツェンツォ氏をソリストに迎え世界初演を指揮した。

2015 年９月より、ヘイスティングス国際作曲音楽祭（イギリス）の首席指揮者に就任、門田展弥氏のオペラ「OTOHIME」管弦楽版世界初演を指揮、オスカー賞受賞作曲家でイギリス作曲界の重鎮、スティーヴン・ウォーベック氏の「コレリ大尉のマンドリン」を氏自ら弾かれたアコーディオンと共演、計３回のコンサートを指揮して、数々の世界初演作品を紹介し大成功を収めた。最近は指揮者活動だけにとどまらず、指揮教室でのレッスン、また「究極の楽器・指揮」（ヤマハホール）、「指揮者側からみたベートーヴェンの第九交響曲の魅力」（羽村市）などの講演活動も活発に行っている。

現在、ヘイスティングス国際作曲音楽祭首席指揮者、東京合唱協会指揮者、日本演奏連盟会員。

ブラームスに想いを寄せて

遠藤　浩史（指揮者）

１９世紀を代表するブラームスと、２０世紀を生きたシェーンベルク。二人の巨匠が出逢って生まれた奇跡の作品が、このピアノ四重奏曲第一番　ブラームス/シェーンベルク編曲版です。

「第 40 回定期演奏会で、この曲にチャレンジしたいのです。つきましては指揮をお願いしたいのです。」

この曲だから私に、という言葉を大変うれしく思うと同時に、そうくるならこっちも一丁やってやろうじゃないか！京都フィロムジカ管弦楽団と一緒に、ブラームスの原曲を、より忠実に再現しようじゃないか！

・・・そんな気持ちが私の中で生まれました。

楽譜は、誤って写譜されることがあります。オーケストラの場合は、さらに各パート専用の譜面が作成されるので、その時にも音が誤る可能性があります。非常に演奏回数の多い曲であれば、第２版、３版等増刷時に修正されていきますが、その機会がない場合は、誤ったまま演奏されるケースも少なくありません。この夏、私は、オーケストラ全体の楽譜が載っているスコアと、ブラームスの原曲の譜面、各楽器それぞれのパート譜、すべて取り寄せました。積み上げると１０cm以上になる楽譜にかこまれ、それを数枚ずつ机に広げ、それぞれの譜面を数小節ごと、音があっているか照らし合わせていく。せみが降るように鳴く中、私の頭の中では原曲と編曲版の音が交互に鳴り続ける。そんな究極に地味で、でもブラームスの世界にどっぷり浸かる幸せな夏を過ごしたのでした。

そうして私は、原曲と編曲版で、音が異なっている箇所をいくつか発見しました。文献によると、シェーンベルクは「敬愛するブラームスの曲をただオーケストレーションしただけ」と言っているため、それは印刷時の誤りであると推測しました。本日は、その修正版で演奏いたします。合わせて各パート譜もできる限り修正しましたので、今回の演奏は、ブラームスの原曲を忠実に再現できるのではないかと思います。

来年以降の夏もきっと、せみの鳴き声を聞くと反射的にこの曲が頭の中で鳴ってしまう気がします。ここまで楽譜と向き合えたのも、京都フィロムジカの熱い思いがあったからです。このような機会をいただいたことを心より感謝します。

さて、ブラームスがシューマンの妻クララに想いを寄せていたこと、そしてその想いが生涯叶わなかったことは、良く知られているところです。この原曲は、彼が想いを寄せるクララ・シューマンその人により初演されました。ブラームスはどんな気持ちでこの曲を書いたのでしょう。胸を締め付けられるような甘く切ない音が初めてクララの指先から生まれた時、ブラームスはどんな気持ちだったのでしょう。

この曲を演奏するにあたり、そんなブラームスの気持ちを演奏者全員で共有することが、原曲を忠実に再現するために必要不可欠だと私は思いました。そこで、初めてのリハーサルに臨むにあたり、楽譜の他に、この曲の音やフレーズに自分なりの「言葉」を付け、心の中でその言葉を歌いながら演奏してほしいと京都フィロムジカのメンバーに伝えました。たとえば第一楽章では、いろいろな楽器が同じフレーズを、交互に奏でる部分があります。「ここはブラームスが『愛するクララよ』と心の中で繰り返しつぶやいています。みなさんもそう歌いながら演奏してください。」こんな感じでリハーサルを行いました。

今回、京都フィロムジカ管弦楽団から、この曲への文章を書いてほしい、と言われたときに、リハーサル時にフィロムジカの方々に伝えた内容をもとに、点と点を結びながら作ったいわば「ピアノ四重奏第一番物語」を寄稿させていただくことを思いつきました。

これはフィクションですが、この曲に対する私のイメージが、京都フィロムジカ管弦楽団だけでなく、本日お越しいただいた皆様にもお伝えすることができ、会場全体でブラームスの世界を共有できましたら音楽を愛する一人としてこんなにうれしいことはありません。

ピアノ四重奏曲第一番物語～　遠藤浩史作

プロローグ

「出会い」「愛の芽生え」「それは叶わぬ恋」そして「一人で生きる」

最初の４小節が雄弁に語る。この切ない想いが叶わないことを。

第一楽章【出会い】

ヨハネス・ブラームスは苦しんでいた。絶対好きになってはいけない人に心を寄せてしまった。自分にとって最もあこがれの人である大作曲家シューマンの家を初めて訪問したときに、シューマンから「何か弾いてごらん」とピアノ演奏を求められた。20歳のヨハネスはうなずき、自作の曲の演奏を始めた。ふとピアノから顔を上げた時に全身を雷で撃たれたような衝撃が走った。シューマンの傍らで、慈愛に満ちた笑顔、気高きオーラをまとった女性がたたずんでいた。その女性の名はクララ・シューマン。尊敬するシューマンの妻。彼は一度に恋に落ちた。

ヨハネスはそれから何度もシューマンの家を訪れることになる。音楽だけでなく、多忙を極めるシューマンに代わって、時には家の修繕を、時には子供の世話を。家族ぐるみで親交を深めていった。その胸の内にある、決して知られてはならない気持ちをひた隠して。

ある日、作曲活動に追われ部屋に籠りきりの夫を心配したクララは、ヨハネスにシューマンを外に連れ出し気持ちの良い空気に触れさせてほしい、と頼んだ。ヨハネスはピクニックを計画し、せっかくだからクララも一緒に行こうと誘った。クララが微笑みながらうなずくのが嬉しかった。

３人は郊外の丘にでかけた。木を渡る緑の風が心地よい。大自然の空気を胸いっぱいに吸い込む。シューマンはヨハネスに、今後作曲家として生きていく上で大切なことを教える。クララは微笑みながらそれを聞く。平和な時。暖かい陽だまり。

ふとクララはシューマンにパンを差し出す。言葉なく微笑みあう二人。ヨハネスはそんな夫婦の仲睦まじい様子から眼をそらすことができなかった。泣きたいが笑うしかない。事実を受け入れるのだ。自分の入る場所はここにはないのだ。

楽章の最後、ヨハネスの心の声がト短調のコードでさびしく響く。

第二楽章【愛の芽生え】

自分でもどうしたらよいのかわからない。自分の心を抑え鎮めることができない事に対する苛立ち。クララを愛してはいけない。そう思えば思うほど、想いは募るばかりだ。

そんなある日、ヨハネスの前に別の女性が現れる。背は高くキリッとした顔立ち、愛くるしい笑顔も印象的だ。声楽を学んでいるという。彼女は積極的にヨハネスにアプローチをしてくる。オペラアリアの楽譜を持ってきては、伴奏を求める。言葉を交わす以外の、音と音による会話、それは音楽をやるものにしか解らない至福の時。彼女はヨハネスの作品をとてもよく理解してくれる。一緒に居るとほっとする。彼女を好きになろう。クララよりも。

しかし無理だった。自分を偽ることは出来ず、心はクララの元に戻ってしまう。自分への絶望を断ち切りたいため、ヨハネスは寝酒をし、そして夢の世界へ落ちていくのであった。

第三楽章【それは叶わぬ恋】

なんと愛に満ちた一日だろう。なぜって、自分にとって一番大切な人であるクララとついに今日、結婚式を挙げるからだ。空は晴れ渡り、天も自分たちを祝福してくれるようだ。ああ、想いは叶うものなのだ！

舞台は丘の上の小さな教会へ。まずは小人たちが入場。その愛くるしい表情に参列者たちも大喝采。いよいよ自分たちの入場だ。結婚行進曲も変イ長調に転調し、音楽はさらに高まる。

しかし、なぜか参列者に笑顔がない。なぜだ。幸せの絶頂のような音楽は鳴り響く。が、だんだん景色が色褪せ、薄く消えていくような感覚に襲われる。

ハッと目が覚めた。すべては夢だったのだ。

哀愁立ち込めたトロンボーンとホルンの響き。そして、慰めるようなオーボエのテーマ。

彼は深くため息をついた。そして立ち上がりカーテンを開けた。雨が降り注ぎ、遠くでは雷が鳴り響いている。

これからどうするべきか。クララに思い切って告白するべきなのか。

そして・・・決断した。

彼女への思いは消し去ることは出来ない。でもこれからは、このエネルギーを作曲活動に向けるのだ。

第四楽章【一人で生きる】

舞台はヨハネス行きつけのホイリゲ（ウィーンの伝統的居酒屋）。ジプシーバンドがツィタールやヴァイオリンをかき鳴らし、お客は皆、酔いしれている。呑んで酔って弾いて踊ってすべてを忘れようというのか。ヨハネスも輪の中に加わり、まずはかけつけ一杯ぐいっと呑み干した。そして片隅にあったピアノに座り、バンドの音楽に合わせてひたすら鍵盤を叩いた。すべてを忘れて、新しい自分に生まれ変わりたいという願いを込めて。

そこへ、懐かしい友人たちが訪ねてきた。まるで新たな旅立ちを祝うかのようなこのタイミング。再会を喜び酒が進む。

ヨハネスはまた弾き始めた。やがて、ピアノとジプシーバンドが演奏する曲は悲歌（エレジー）に移る。ジプシーヴァイオリンの寂しげな音色が、人びとを哀愁に誘う。今までの出来事が走馬灯のように流れる。

しかし曲調はすぐに、アップテンポに戻り、さらに音楽もお酒も盛り上がってきた。

と突然、ヨハネスは思い出す。あの人のことを。

既に酒量は許容量をはるかに超えていた。彼は崩れ落ちるように倒れた。意識が薄れゆく幻想の中で、二人はダンスを踊っている。彼女の寂しげな表情。彼は振り払うようにその場所から走り去る。クラリネットの悲痛な叫び。

やがて意識もどったヨハネスはおもむろに立ち上がり外に出た。彼は煙草を一服ふかし、目を閉じた。

店の中ではジプシーバンドが、また賑やかな音楽を始めた。よし！朝まで踊ろう。とにかく朝まで踊ろう！

エピローグ

12月のウィーンの夜は相当冷える。しかしヨハネスには心地よく感じられた。

そう、彼女の笑顔があればそれでいい。自分は一人で生きるのだ。

彼女への想いは自分の心の奥底にしまうのだ。深く深く閉ざすのだ。それでいいじゃないか。

曲目解説

遠藤 啓輔（トランペット）

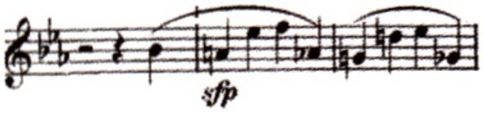
シューマン／劇付随音楽『マンフレッド』序曲

…舞台は雪と氷河に覆われたアルプスの山中。谷間から霧が立ちのぼり、滝の上に虹がかかる。この厳しくも美しい風景の中、孤高の主人公マンフレッドは苦しんでいた。彼は並外れて高い知性と豊富な知識を持っているが、それゆえ、苦しみもかえって人一倍強く感じられるのだ。そして、彼はかつて血縁関係のある女性アスターティを深く愛したが、その罪ある愛のために彼女を死に追いやった(彼女は墓に埋葬されることすら許されなかった)。その過去が彼を一層苦しめていた。

妖術をも操れるまでになった才人マンフレッドは、無限の宇宙の各所に住まう（キリスト教世界から見れば邪悪な）精霊たちを呼び出す。そして、自分を苦しめる原因である知識と苦い経験を消し去るために「忘却をくれ！」と要求する。しかし精霊たちは、「忘却を得たいならば死ぬしかない」、とにべもない。

マンフレッドはさらに、霊界に行き、精霊たちの首領・邪神アリマニーズの宮殿にまで乗り込む。そこでアリマニーズに命じて恋人アスターティの死霊を冥界から呼び出させる。マンフレッドはアスターティに「私を赦してくれるか？」と尋ねるが、彼女は答えない。そのかわり、間もなくマンフレッドが死ねることを予言する。

死期の迫ったマンフレッドのもとに聖職者が来て、神への祈りによる救済を勧めるが、マンフレッドはそれをかたくなに拒否。やがて瀕死のマンフレッドのもとに死神たちが現れて「さあ、こっちに来い」と呼びかける。ところがマンフレッドは「これまでの孤高の生きざまと同じく、死ぬ時も一人だ」と言って、死神たちを追い払う。こうしてマンフレッドは、一人で死んでいく。彼の魂がどこへ行ったのかは見当もつかない…



譜例１

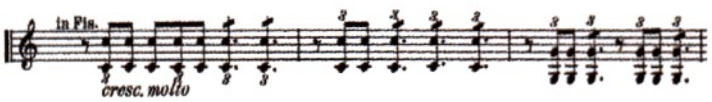
イギリスの詩人バイロンによるこの戯曲から、文学の才能も深かったシューマンが音楽劇を作り上げた(オペラとは異なり、台詞は朗読され、音楽は劇に付随するBGM的扱いである)。本日演奏するのはこの音楽劇『マンフレッド』の序曲である。オペラの序曲と同様、作品全体を俯瞰し凝縮したような作品と考えられる。ただし、残念ながら序曲の旋律とその後に展開する劇付随音楽との間にはそれほど関連性がない。両者に共通して聞かれる旋律は**譜例１**ぐらいだ。**譜例１**は、序曲の全体を悲劇的に彩り、そして、音楽劇の最後で、マンフレッドの死に際して再び登場する。

ただし、劇付随音楽のオーケストレイションに着目すると、序曲の情景を考える際の参考になる。

劇中、アルプスの山脈を描く場面ではホルンが勇壮に活躍するが、序曲で活躍するホルンも、そうした自然の威容を表現しているものと考えられよう。

また、劇中で精霊たちの首領・邪神アリマニーズが登場する場面では、背後で必ずトロンボーンが重々しく鳴っている。このように、神や悪魔など人智を超えた存在を描く際には伝統的にトロンボーンが用いられる。序曲でも大活躍するトロンボーンは、こうした神々や精霊たちを表現しているのであろう。

そして、劇中で恋人アスターティの死霊が登場した場面では、マンフレッドの興奮した心情を表現するかのように３連符が連打される(**譜例２**)。この扇情的な連打は序曲でも多用される。なお、こうした表現は、シューマンの後継者とも言うべきブラームスも、本日演奏するピアノ四重奏曲第１番において多用している。是非ご注目いただきたい。



譜例２

また、劇の終盤で、死神がマンフレッドに「来い！」と呼びかける場面では、トランペットの低音が不気味に

鳴る。トロンボーンを使えば楽に出せるであろう低音をトランペットに無理やり吹かせるのは、死神の不気味さを表現するためだろう。序曲でも終盤で、トランペットの低音が死神のように不気味に鳴る。この後、心臓の鼓動が止まるかのように音楽がいったん静かに収束すると、**譜例1**が慟哭のように回顧され、悲痛のうちに序曲が閉じられる。

シャブリエ／『田園組曲』

峻厳なアルプスの威容を舞台に苦悩を描いた『マンフレッド』の後にお聴きいただくのは、打って変わって穏やかで明朗な田園情緒を描いたシャブリエの作品である。

シャブリエは 19 世紀フランスのピアニストにして作曲家であり、ピアノ曲やオペラのほか、ピアノ曲を自ら管弦楽編曲したオーケストラ作品も残した。青年時代は国家公務員を本職とするアマチュア作曲家で、音楽の枠にとらわれず文学界や美術界とも親交を深める。特に印象派の画家マネとは友人であった。世代的にはブラームスとほぼ同じ。ただし、ブラームスがヴァーグナーとある種ライヴァル関係にあったのに対し、シャブリエはヴァーグナーに心酔していた。こうした印象派絵画的な趣味や、ヴァーグナー風の複雑な和声への志向のためか、シャブリエのオーケストラ作品は色彩感が豊かで、ラヴェルらの後輩作曲家に強い影響を与えた。

本日演奏する『田園組曲』は、ピアノ曲集『10 の絵画的小品集』から 4 曲を選んで自らオーケストレイションしたものである。この原曲は、シャブリエが 40 歳を前にして公務員を辞し、作曲家を専業とした翌年、1881 年の作品である。この頃シャブリエはスペインに行き、アンダルシアの歌や踊りに接する。ここで体感した民謡や舞曲がこの作品にも反映している。クラシック音楽における「田園」は、文明のために失われた理想郷への憧憬といった感情が反映しているという。シャブリエはスペインの片田舎に理想郷を見たのかもしれない。

『田園組曲』の**第１曲**は「牧歌」(Idylle)。遠い丘から教会の鐘がかすかに聞こえてくるかのような、トライアングルの清澄な音で始まる。草原を心地よく風が吹き抜けるような程好いスピード感を持って歌が流れ、ときおり木管が愛らしく囀る。花鳥風月の美しさと、そこに生きる人々の営み、それらを慎ましく包摂したような穏やかな小品である。

第２曲は「村の踊り」(Danse Villageoise)。幼少期からピアノの才能を発揮したシャブリエは、8 歳頃には既に舞曲を作曲していた。この舞曲はスペインの田舎での体験が生きているのか、野卑な力強さが魅力である。

第３曲“Sous Bois”(スー・ボワ)は「木陰」と訳されているようだが、どうやらそれだけでは説明が不足するようだ。僕は外国語が全くできないのでインターネットで「スー・ボワ」について検索したところ、意外にもワイン関連のサイトが多くヒットした。これらによれば、「スー・ボワ」とは、湿った森の地面が、落ち葉の腐食やキノコやコケの繁殖によって熟成していく様子を、肯定的に表現した言葉だそうだ。そして熟成したワインの香りを表現するのに「スー・ボワ」の語を使うらしい。僕は酒にも疎いので正確には理解できないが、要は生命が繁殖する環境として土壌が肥えていく様相なのだろう。そう思うとこの曲もよく理解できる。この曲は終始チェロが地鳴りのようにかすかに動き、木管が断片的な短い動機を断続的に吹く。一見すると抽象的でわかりにくい音楽に思われるかもしれない。しかし例えば、チェロの静かな声は土壌の微生物たちの活発な運動だろうか、木管の小さな動きは草木たちの芽吹きだろうか、などと想像すると、偉大な生命のゆりかごを音楽で表現したものだとすんなり受け入れることができる。全曲の白眉と言うにふさわしい傑作だ。

終曲は「スケルツォ - ワルツ」。スケルツォもワルツもともに３拍子の音楽だが、ワルツが典雅な舞曲なのに対し、スケルツォ(諧謔曲)は激しく力強く底抜けに楽しい曲だという違いがある。荒々しい主部がスケルツォ、慎ましく輪舞するような中間部がワルツということだろうか。主部（スケルツォ？）では、打楽器の炸裂やバグパイプ(ミュゼット)のような粗野な管楽器の吹奏を伴い、まるで村の楽団が祭りを盛り上げているようだ。対して中間部（ワルツ？）は、ためらいがちに何度も音楽が静止する。村の青年と娘が、ワルツのパートナーを探して駆け引きをしているようで面白い。

ブラームス作曲・シェーンベルク編曲／ピアノ四重奏曲第１番・管弦楽編曲版

第１章　ブラームスとシェーンベルク

片や古典派の大家ベートーベンの後継者を自他ともに認めていた 19 世紀の巨匠ブラームス、片や音楽史上の大変革ともいうべき 12 音技法を開発した 20 世紀音楽の旗手シェーンベルク。こう並べると相反する存在のように見えるが、両者には緊密なつながりがある。ブラームスとシェーンベルクのつながりは次の２点で有名である。一つは本日演奏するブラームス作曲ピアノ四重奏曲第１番をシェーンベルクがオーケストラ編曲したこと。そしてもう一つは、シェーンベルクの名論文『進歩主義者ブラームス』である。

ここで、この『進歩主義者ブラームス』について紹介しておきたい。幸いこの論文は、久保田慶一ら東京学芸大学のグループによって日本語訳され Web サイトでも読むことができる。また、林睦「ブラームスにおける「発展的変奏」の技法　―シェーンベルクの視点を用いた作品分析―」『赤いハリネズミ』22(日本ブラームス協会, 1992)でも親切に説明されており、大いに参考になった。

この『進歩主義者ブラームス』は、実はブラームス一人を称揚した論ではない。優れた作曲家は等しく「進歩的」であることを論じたものである。当時(あるいは現在においても)支配的な考え方であった「擬古典的なブラームスと進歩的なヴァーグナー」という二項対立的な発想に疑義を呈し、ブラームスもヴァーグナーに勝るとも劣らぬ進歩的な作曲をしていた、いや、さらに古いモーツァルトでさえもその作品にきわめて進歩的な面が見られる、ということを指摘したのだ。

そしてシェーンベルクは、「進歩的」だと言える理由を、**「和声」**、**「非対称性」**、**「発展的変奏」**、の３点から論じた。「非対称性」とは耳慣れない言葉だが、これは繰り返しを排した旋律を指している。音楽を無意味に反復すると小節数は２の倍数になるが、シェーンベルクはそうした構造の音楽を嫌悪したようだ。逆にシェーンベルクは、作曲者の思いが直接的に表明された自由な音楽を高く評価しており、そうした音楽は２で割り切れない(「非対称」の)小節数になる場合が多い。次に、「発展的変奏」とはシェーンベルク独特の音楽分析法である。彼は旋律の一音一音の変化を微細に分析し、「ひとつの基本となる音楽単位が発展していくことによって、楽曲全体が関連付けられている」ことを明らかにした。

論中でいくつかのブラームス作品が分析の俎上に上がっているが、残念ながら本日演奏するピアノ四重奏曲第１番は分析対象になっていない。もしシェーンベルクがこの曲を分析したらどのように論じてくれたであろうか？　僕なりに考えてみたいのだが、「和声」については素人の僕にはさっぱりわからないし(ただし次章で述べるように、素人なりに「凄い」と感じられる部分はある)、「非対称性」については、果たしてこのピアノ四重奏曲第１番に当てはまるのかどうか、はなはだ疑問である。この曲は同じフレーズの繰り返しが多く、小節数が２で割り切れる「対称性のある」旋律も多く見られる(そもそも僕は単純な繰り返しが好きなので、「非対称性」を称揚するシェーンベルクの論自体に共感できない)。こうなると、ピアノ四重奏曲第１番について僕がシェーンベルク風の分析を試みられるのは「発展的変奏」だけになりそうだ。次章では、シェーンベルクの「発展的変奏」の発想に基づいて、ピアノ四重奏曲第１番を僕なりに分析してみたい。

第２章　ブラームスのピアノ四重奏曲第１番をシェーンベルク風に分析してみる

まず冒頭の第１小節(**譜例①**)を見てみる。４拍子の１小節内に４分音符が４つ並ぶだけ、しかも主調のト短調の和音の構成音である「ソ」・「シ♭」・「レ」に、「ファ♯」が加わっただけ。しかし、これがとてつもなく凄いのだ。

そもそもト短調ということ自体が挑発的だ。モーツァルトの２曲しかない短調の交響曲がいずれもト短調であることから、クラシック音楽においてト短調は特別な意味を持つ。「ト短調」と聞いただけで、モーツァルト 25 番や 40 番のごとく、心臓を切り裂くような力を持った悲痛な音楽が襲い掛かってくることが期待されるのだ。

そして、ブラームスは「レ」の音から始め、2音目でいきなり6度上の「シ♭」に跳躍する。この6度というのは何とも居心地の悪い跳躍だ。このことを、わかりやすく、ドミソの和音を例に説明してみよう。ドミソの和音の場合、「ド」に対して、「ミ」は3度の関係、「ソ」は5度の関係と呼ばれる。この3度や5度の動きが、聴いていて一番居心地がいいのだ。例えばベートーベン第1交響曲の主要主題はまさに、「ドー・ミ・ソー」と始まり、実に安定感がある。対してブラームスのこの曲は、3度でも5度でもない、6度上にいきなり飛んでしまうのだ。冒頭の「レ」の音が記憶に残っている聴衆は、その6度の跳躍に違和感を覚え、「3度なり5度なりの居心地のいい音に移ってくれないかな」と無意識のうちに感じるはずだ。するとその聴衆の期待にこたえるかのように、3音目は冒頭の「レ」に対して3度の関係にある「ファ♯」に移る。ト短調の和音に無い「ファ♯」の音をここに敢えて入れることで、記憶の中の「レ」と長調の和音を作るという居心地の良さが実現するのだ。しかしそれも束の間、4音目で半音上昇し、居心地の良さは一瞬で解消してしまう。そして、この1小節間の動きは、冒頭の「レ」から4音目の「ソ」まで4度上昇したことになり、やはり3度とも5度とも違う居心地の悪さを感じさせる結果に終わるのである。

次に第1フレーズを構成する4小節間全体を見てみる(**譜例①**)。1小節目を特徴づけていた半音の動き、あるいは4度の動きが、2小節目以降は下降形に転回する。4小節目で初めて和音が出てくるが、長調の和声が瞬間的に聞こえてくる。悲痛なト短調の旋律の動きを長調の和声で彩るというのは、なかなか凄いことではないだろうか？　こうして4小節かけて動いた行き着く先の音は、冒頭より1オクターヴ下の「レ」の音になる。つまり、ひとフレーズかけて、1オクターヴ下降する旅をしたことになる。このようして冒頭4小節間を分析すると、この曲を特徴づける、シェーンベルク風に言えば「音楽的単位」とも呼ぶべき動きを以下のように整理できる。

6度跳躍(または下降)／半音上昇(または下降)／4度跳躍(または下降)／オクターヴ下降(または上昇)

これらの諸要素は、この後に登場する動機群にも使用されていく。**譜例②**は第1楽章の一部だが、上記の要素のうち、オクターヴ、4度、半音の動きで作られる。**譜例③B**も第1楽章の一部だが、上記要素のうち、最も小さな動きである半音の動きと、最も大きな動きであるオクターヴ下降だけで構成した、簡潔かつ大胆なものである。

そしてこれら要素は、第1楽章のみならず各楽章でも印象的に用いられる。

譜例④は第2楽章の冒頭だが、「ミ♭」から「シ」まで4度下降したのち半音上昇して動機を締めくくっており、4度下降と半音上昇が見られる。注目されるのは譜例の矢印部分で、一貫して「ド」の音を弾き続ける伴奏と、旋律の「シ」と「レ」が鋭い不協和音になる。半音上昇して不協和音から解放されるので、この半音上昇の動きが否応なく意味深くなる。

第2楽章は3部形式をとるが、トリオ(中間部)では半音の動きに加えて6度の動きもみられる(**譜例⑤**)。

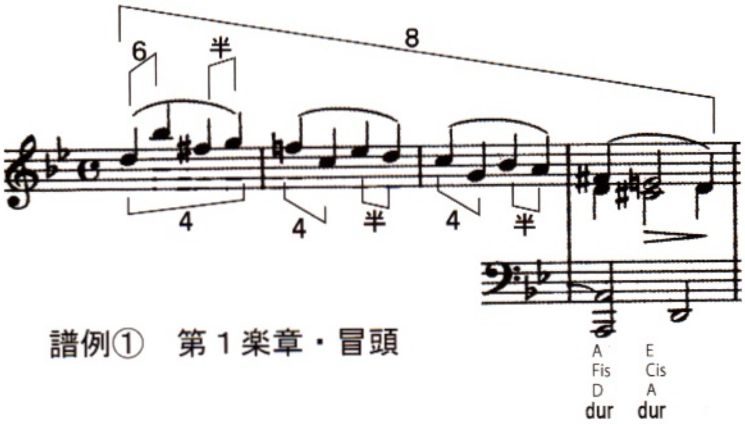
第3楽章は冒頭から4度跳躍と半音上昇を素材として展開する(**譜例⑥B**)。

そして全曲の締めくくりとなる第4楽章のコーダは、6度跳躍と半音上昇でクライマックスを作り(**譜例⑦B**)、4度跳躍とオクターヴ下降で全曲を締めくくる(**譜例⑧**)。そして、ここでは冒頭(**譜例①**)同様、長調の和音とト短調の音楽が並置されているのも印象的だ。

こうして見ると、このブラームスの作品は、全曲が関連するよう綿密な工夫がなされていることがよくわかる。

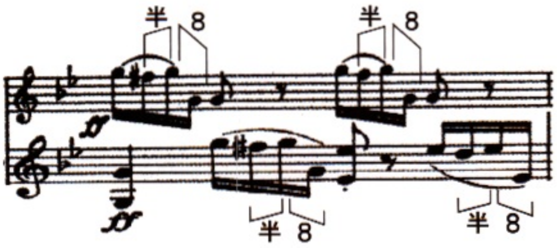
第3章　ブラームスの音楽とシェーンベルクの編曲

前章では、『進歩主義者ブラームス』におけるシェーンベルクの分析法を用いて、ブラームスのピアノ四重奏曲第1番を分析してみた。結果、ブラームスが全曲に一体感が出るように綿密な工夫をしていたであろうことが明らかになったが、はたしてシェーンベルクによるオーケストラ編曲は、このブラームスの工夫を踏まえてなされているのであろうか？　そこで、前章で分析した箇所のシェーンベルク編曲版を見てみると、シェーンベルク

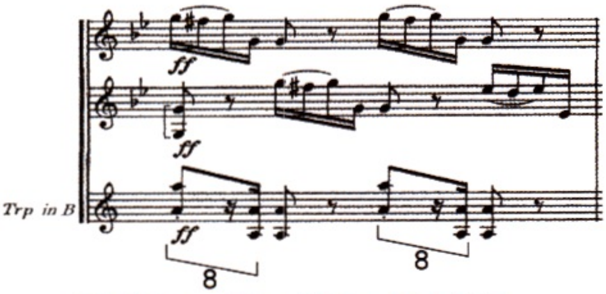


譜例①　第１楽章・冒頭

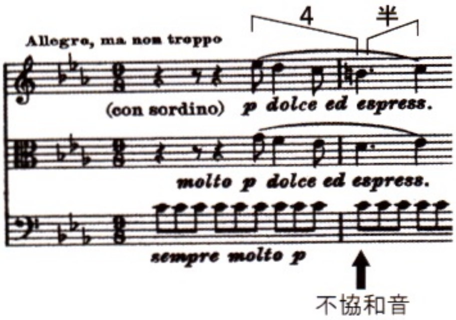
譜例②　第１楽章・21小節目



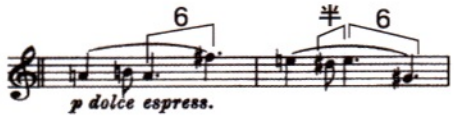
譜例③Ｂ　第１楽章・35小節目
（ブラームスの原曲）



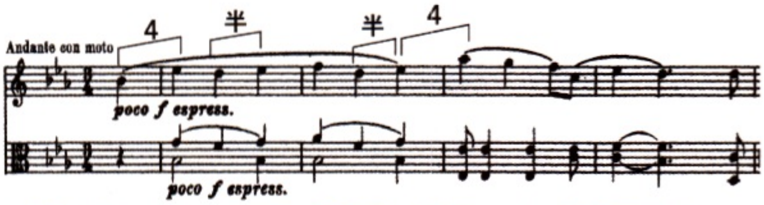
譜例③Ｓ　第１楽章・35小節目
（シェーンベルクの編曲）



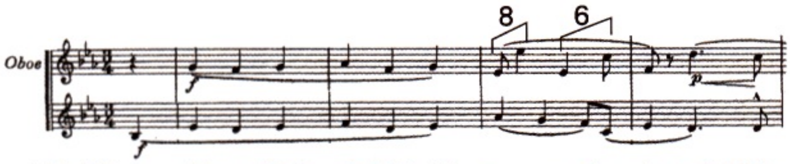
譜例④　第２楽章・冒頭



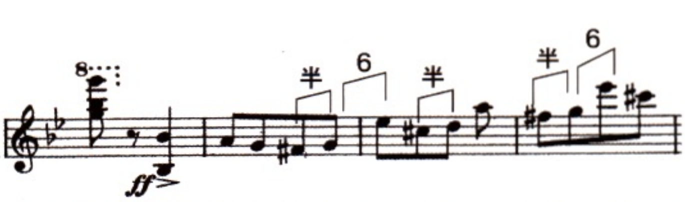
譜例⑤　第２楽章・トリオより



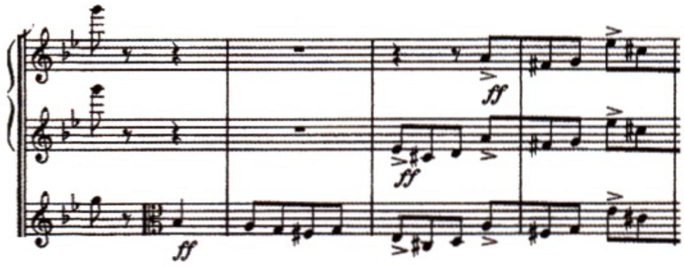
譜例⑥Ｂ　第３楽章・冒頭（ブラームスの原曲）



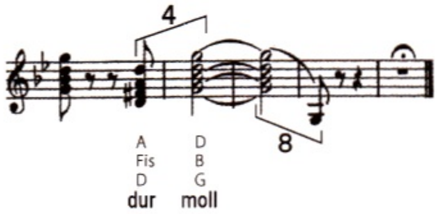
譜例⑥Ｓ　第３楽章・冒頭（シェーンベルクの編曲）



譜例⑦Ｂ　第４楽章・コーダより（ブラームスの原曲）



譜例⑦Ｓ　第４楽章・コーダより（シェーンベルクの編曲）



譜例⑧　第４楽章・末尾

凡　例

6　：６度上昇または下降

半　：半音上昇または下降

4　：４度上昇または下降

8　：オクターヴ上昇または下降

dur：長調の和声

moll：短調の和声

がブラームスの作曲技法を一層引き立てようとして様々に工夫していることがよくうかがえるのである。

たとえばシェーンベルクの編曲である**譜例③S**を見ると、音の目立つトランペットにオクターヴ下降を強調させている。これによって、半音の動きとオクターヴの動きの組み合わせというこの箇所の大胆さを引き立てているのである。

さらに出色なのは第３楽章の冒頭だ。原曲(**譜例⑥B**)で鳴っている多数の音の中から、シェーンベルクはいくつかの音を拾い上げてオーボエの旋律を新たに編み出しているが(**譜例⑥S**)、このフレーズの末尾にはオクターヴ跳躍と６度跳躍が見られるのだ。まさにこの曲の「音楽的単位」から生れ出た旋律と言える。シェーンベルクの創作でありながらも、ブラームスのオリジナルと見まがう一体感があるばかりか、この曲を特徴づける「音楽的単位」を一層わかりやすく引き立てる効果を出しているのだ。シェーンベルクのブラームス愛が生み出した傑作的なオーケストレイションと言えよう。

第４楽章コーダでも、この６度跳躍を印象付ける編曲をおこなっている。６度跳躍して行き着いた音をシェーンベルクはアクセントで強調し、しかも、この音から新たに楽器が加わるようにして６度の動きを強く印象付けているのだ(**譜例⑦S**)。

このシェーンベルクによるオーケストラ編曲版は 20 世紀的色彩に耳が奪われがちだ。木琴などの打楽器や金管の特殊奏法など、およそブラームスらしくない音がふんだんに使用されている。にもかかわらず、この曲は決してキワモノ的な扱いを受けることはなく、知る人ぞ知る名曲として、とりわけブラームスを愛する人たちに評価されている。前述のように、作品全体を有機的に統一するブラームスの綿密な作曲技法をシェーンベルクがしっかりと踏まえて編曲しているからだろう。

ここまで作品を切り刻むように細かく見てきたが、もちろん聴きながらそのような分析をする必要はない。どうぞ音楽の流れに身を浸してきていただきたい。しかし、たとえば「４つの楽章それぞれが全く異なる個性を持っているのに木に竹を継いだような印象は受けない。一つの作品としての一体感がある。不思議だ！」などと、ふと感じていただけたら嬉しい。それは、２人の大作曲家の、気の遠くなるような綿密な作業が実を結んだ瞬間だからだ。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村　里香様	辻　良治様	種坂　勝様
杉本　幸子様	西　英子様	土屋　健太郎様
安藤　美知穂様	河内　尚和様	岡本　洋采様
鎗本　和弘様	森永　千一様	薮田　寛様
谷口　佳隆様	髙岡　拓也様	奥井　実様
西坂　壽美子様	和田　之宏様	
鈴木　一俊様	玉山　茂夫様	

2002 年４月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(11 月現在)

新規会員募集中です。詳しくは裏表紙をご覧ください。

京都フィロムジカ管弦楽団
Philomusica Orchester Kyoto

Konzertmeisterin
馬渕　清香※
(Brahms)
八木　愉希絵
(Schumann,Chabrier)

Violine
小幡　拓也
八木　愉希絵
渡辺　達之輔
青木　麻須美・
加藤　慶太・
木村　誠志・
佐々木　啓介・
下田　雄史・
須田　謙史・
千徳　信好・
谷内　優子・
谷口　峻介・
寺島　千尋・
中嶋　幸・
中辻　圭郁・
馬場　沙也・
前川　信幸・
安原　由克子・
吉川　正剛・
渡邊　隆寿・
香川　玲子※
福澤　敬子※
馬渕　清香※

Bratsche
上田　秀樹・
鵜飼　大介・
久保　将哉・
榑林　哲也・
富　研一・
馬場　広太郎・
古田　直道・
昌谷　洋・
吉川　昌毅・

Violoncello
奥村　友梨香
多田　進
西山　峻司
秦野　貴生
松浦　悟子
松浦　由香
高村　誠・

Kontrabass
茂原　尚樹
田中　明江
田中　郁太郎
藤井　輝之
石坪　智美・
福島　史子・
丸山　拓史・
寺村　有史※

Flöte
高松　香陽子
(Piccoloflöte)
鳥山　梓
間嶋　美波
(Piccoloflöte)
御園生　香
(Piccoloflöte)
山口　佳美

Oboe
木津　怜美
西川　紗希
山内　翔太・
太田　えり・
(Englischhorn)

Klarinette
植山　彩花
野澤　真以
田尻　裕彰・
(Kleine Klarinette)
山田　美保子・
(Bassklarinette)

Fagott
石塚　有里子
大槻　萌絵
桃川　大毅・
近藤　紀宏※
(Kontrafagott)

Horn
加藤　実可子
北山　絵里
中澤　美帆
福山　百音
千場　信孝
山影　つぐみ
渡辺　悠

Trompete
遠藤　啓輔
北山　武志
瀧澤　実帆
天神　知信・

Posaune
中村　三鈴
宮下　秀行

Bassposaune
安田　泉穂・

Tuba
中塚　隆介※

Pauken
籾井　渉※

Schlagzeug
岡田　芳恵※
木村　祐※
佐藤　晶子※
新角　耕司※
平瀬　光代※

・：団友
※：客演奏者

団長
多田　進

事務
西村　浩

客演コンサートミストレス

馬渕　清香
大阪府出身。桐朋学園大学卒業。小国英樹、原田幸一郎、工藤千博、森悠子、田辺良子、岩崎淑、R.ブレンゴラの各氏に師事。1990年全日本学生音楽コンクール第1位をはじめ、イタリア・シエナのギジアーナ音楽祭ギジアーナ・ディプロマ賞受賞、コンセールヴィヴァン・オーディション最優秀賞受賞、イタリア・グッビオ国際Duoコンクール入選、東京国際芸術協会レ・スプレンデル音楽コンクール室内楽部門入賞など、国内外で多数の受賞歴がある。ソロ・リサイタルの開催のほか、オーケストラ、室内楽でも活躍。「DUO MOON STONES」「四次元三重奏団」メンバー。

弦トレーナー

岩井　英樹
名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎　雅夫
京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC.マクベス、A.ハーゼス、M.アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

第41回定期演奏会

2017年6月25日(日)　大津市民会館　大ホール

ホルスト／『サマセット・ラプソディ』
ゲーゼ／交響曲第８番
エルガー／『エニグマ変奏曲』　　指揮：滝本 秀信

新入団員随時募集中

～私たちと一緒に演奏しませんか? まずはお気軽に見学にお越しください。 団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

＜募集パート＞

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス　**（ヴァイオリン・ヴィオラ急募！！）**
オーボエ・クラリネット・ファゴット・トロンボーン・テューバ・打楽器

※テューバ・打楽器は諸条件について要相談

〔入団資格〕練習に出席できること。年齢制限はありません。学生の参加も歓迎します。
〔練習日時〕毎週日曜日（午後1時～午後5時）　春と秋に練習合宿（大津市内。合宿費は 10,000 円程度）
〔練習場所〕京都芸術センターなど京都市内各所のほか、大津市など
〔諸 費 用〕活動費：3,000 円/月　演奏会参加費：20,000～30,000 円（学生・初回参加の方には割引あり）

入団・見学に関するお問い合わせ先　E-mail：recruit@kyotophilo.com

「友の会」会員随時募集中

フィロムジカの活動を応援してくださる方を募集しています

【年会費】　１口　1,000円
【期　間】　ご入会いただいた月より１年間
【特　典】　1. 期間内の定期演奏会に、１口につき１名様を無料ご招待
2. その他演奏活動のご案内
3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ　Tel&Fax 075-605-0123 (西村)　E-mail：tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

http://www.kyotophilo.com/

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。